

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

北海道大学

前期

科目

世界史

総括

試験時間	90 分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	150 点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

問題は2010年以来、大問3題である。論述の形式は字数制限ではなく、行数指定である。今年の論述は16問・31行で、11～17問・27～34行の範囲内で推移していたこの10年間では昨年の17問に次いで多かったが、行数は平均的だった。2016年以降は5行論述の出題はなく、昨年度は4行論述が出題されなかったが、今年は1問出題され、1問あたりの行数は1行指定から4行指定までであった。1行を30字で換算した場合、1000字近い分量である。ただし、論述の内容自体に難解なものではなく、何を書けばよいか定まれば、どの問題も比較的書きやすかったはずだ。ただ、北大の論述問題は基本的ではあるものの合格点を狙うためにはただ書けばいいというのではなく、設問をよく読み、出題者の意図に沿って的確にキーワードを含めて内容を取捨選択しまとめる力が必要となる。内容も教科書に書かれているものが中心だが、逆に教科書に書かれている事項については、その背景や前後関係を正確に記述することが問われることがある。そのため、事項やその時代を広くとらえつつ、問題演習をしながら教科書に戻って事項の背景や内容をしっかり確認し、理解することが大切である。論述問題以外では、例年どおり選択問題は出題されず、記述問題が28問、うち空欄補充が12問で、すべて短答式の記述問題である。これらも基本的な事項からの出題がほとんどで、ここで基礎点を重ねておくことが必要である。

〈特記事項・トピックス〉

昨年度から歴史総合も出題範囲とされたが、昨年度と今年は歴史総合の範囲にしかない問題は出題されていなかった。空欄補充問題は出題されない年度もあるが、今年大問3題すべてで出題された。今年はグラフの読み取りや、図版をもとに比較・説明する論述問題はなかったが、**1**で史料を読み、何についての史料かを答えさせる問題が出題された。また、昨年度は指定語句のある論述問題が出題されたが、今年は見られなかった。今年は**1**でユダヤ人をめぐる歴史、**2**ではオスマン朝の勢力圏の拡大、**3**では疫病をテーマとした問題が出題された。時代的には古代～近世からの出題がほとんどで、近現代史からの出題が少なく、例年見られる戦後史からの出題については、直接的な問題は見られなかった。地域的にも中国史からの出題は地域間の交流の中で出題されただけで、西欧史、アメリカ史、西アジア史からの出題にかたよっていた。出題分野に関しては、政治史と社会経済史がほとんどで、文化史からの出題は例年に比べ少なかった。例年は戦後史を含めた現代史、各地域の交流、文化史などが無視できない程度の比重を占めるが、今年は例外的と言えるだろう。出題傾向は必ずしも一定しているわけではなく、2019年のように文化史の比重が大きかったり、あるいは2020年のように現代史の比重が大きかったりすることもあり、どの時代・地域・分野から出題されても答えられるようにカバーしておくことが大切である。全体的に北大世界史について言えることは、単に知識を問うだけでなく、内容の歴史的理解がしっかりされているかを問う問題が多く出題されるということである。出題形式だけでなく出題内容においても時代や地域を越えた問題が出題されることも多く、広い視野で世界史をとらえる学習が必要である。問われていることは教科書に書いてあることばかりだが、それがしっかり書けるかどうかは別問題である。単なる暗記ではなく、教科書を中心にしつつ、地図や図版を使用した着実な学習こそがテーマ史対策・論述対策となり、北大入試突破への道と考えてほしい。

〈合格への学習対策〉

論述の量に関しては例年設問数11～17問、合わせて30行前後である。90分という短い時間で論述問題を攻略するにはかなりの準備と訓練が必要で、短期間で習得できるものではない。ただ、ほとんどの論述問題は頻出の分野なので、これには2～3行の基本的な論述を中心に練習をこなす経験値が必要となってくる。書いたあとで模範解答と照らし合わせ、どう違うのかを比べて考え、これを繰り返すことが大切だ。論述問題の配点は全体の6割強と大きいので、手がつけれないものがないように、できる限り得点を積み重ねられるよう、普段から練習をしておく必要がある。問われていることは教科書に記載されている内容であるから、難問対策に余計な時間を割くのではなく、標準的・基本的な論述を確実に得点できるような学習を心掛けるべきである。また、90分という制限時間内でできる限りのことを絞り出さなければならない。そのためには、授業で展開される基本的な事項を、おおよそのイメージがわかったからといって済ませるのではなく、自分の力でじっくりと論述問題に取り組み、時代背景を意識しつつ、問題意識を持って自分の中で納得のいくストーリーを構築し、文章に書いてまとめる練習をすることが肝要である。しっかり書くことが結果的に速く書けることにつながり、得点に確実に結びつくのである。

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

設問ごとの分析

問題 番号	出題 形式	分野・テーマ(表題)	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題 レベル
1	記述 11 問 論述 4 問	ユダヤ人をめぐる歴史	ユダヤ人をめぐる歴史を中心としたリード文を通して、古代オリエントから古代・中世ヨーロッパ、初期イスラーム時代の政治史を中心に扱った問題。短答式の記述問題は全て基本レベル。論述の「古代のユダヤ人の信仰の特徴」、「マケドニアの勢力拡大」、「正統カリフによる征服活動と征服地の支配体制」、は基本的な頻出問題。「ミラノ勅令についての説明」は史料を見て答える問題だが、設問文にもヒントがあり、設問で聞かれていることを答えればよいので他の論述問題より容易に得点できたことと思う。	標準
2	記述 8 問 論述 6 問	オスマン朝の勢力圏の拡大	オスマン朝の勢力圏の拡大をテーマとして、政治史、社会経済史、文化史を幅広く問う問題。短答式の記述問題は全て基本レベル。論述の「フェニキア人が果たした文化的役割」、「オスマン朝によるビザンツ征服後の事業」、「ボスフォラス・ダーダネルス海峡をめぐる対立」、「マムルーク朝滅亡後のオスマン朝の宗教的地位」は基本的な頻出問題。「オスマン朝領内の東西交易」「オスマン朝による東方への拡大」については、手がつけられないということはないが、交易品や担い手、そして地理的な位置を確実に把握しておくことが大切で、2行でまとめるのは難しいかもしれないが、加点点ポイントとなりそうなことを手際よく挙げていくことで得点が重ねられるはずだ。	やや難
3	記述 9 問 論述 6 問	疫病の歴史	ペスト、天然痘、コレラ、インフルエンザといった疫病が歴史に与えた影響に関する文章を通して、中世～現代のヨーロッパ、アメリカ大陸の政治・社会について問う問題。短答式の記述問題は全て基本レベルだが、「コロンブス交換」については交易品目ではなく作物の伝播を答えるので、注意して解答しよう。論述の「ペストの荘園制に与えた影響」「エンコミエンダの説明」「第一次世界大戦におけるアメリカ参戦の契機」は基本的な頻出問題。「都市でユダヤ人がおかれていた状況」「産業革命期の労働者の居住環境」は、ぼんやり理解したつもりだった人はうまく文字化できなかったかもしれないが、キーワードをしっかりと埋め込んでいく必要がある。「第一次大戦前後のアメリカ外交の変化」は、一問一答的な知識では難しかったかもしれないが、アメリカの孤立主義が2つの世界大戦でどうなったか、現在までのような道筋でたどってきたかを大局的にとらえているかを測る良問と言える。今後もこのような問題が増えると思うので、現代社会がかかえる問題を意識して歴史を学んでいく態度をもってほしい。	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階【難・やや難・標準・やや易・易】で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。